

Real rank 1 の半単純リー群の compact 商空間 における Selberg zeta 関数

広大 理 若山 正人

A. Selberg が [8] で定義した compact リーマン面に付随したある種の Dirichlet 級数 (Selberg zeta) の理論は, その後 R. Gangolli によって一般の rank 1 の対称空間に拡張されている。本稿の目的は, rank 1 の対称空間の compact 商空間上の vector bundle に付随した Selberg 型の zeta 関数を構成しその性質を調べることにある。(特別な場合は既に [7] 等がある。)

§1. 準備

G を real rank 1 の連結, non-compact 半単純リー群で中心有限なものとし, K をその極大 compact 部分群の 1 つとする。 $\mathfrak{g}, \mathfrak{k} \in \mathfrak{g}, K$ のリー環とし, $\mathfrak{g} = \mathfrak{k} + \mathfrak{p}$ を \mathfrak{k} によって定まる involution θ による Cartan 分解とする。 $\mathfrak{a}_{\mathfrak{p}}$ を \mathfrak{p} の極大可換部分空間, $\mathfrak{a} \in \mathfrak{a}_{\mathfrak{p}}$ を含む θ -stable な \mathfrak{a} の Cartan 部分環 ($\mathfrak{a} = \mathfrak{a}_{\mathfrak{k}} + \mathfrak{a}_{\mathfrak{p}}$, $\mathfrak{a}_{\mathfrak{k}} = \mathfrak{a} \cap \mathfrak{k}$, $\mathfrak{a}_{\mathfrak{p}} = \mathfrak{a} \cap \mathfrak{p}$) とする。 $\mathfrak{a}_{\mathbb{C}}, \mathfrak{a}_{\mathbb{C}} \in \mathfrak{a}, \mathfrak{a}$ のそれぞれの複素化とし $\Phi(\mathfrak{a}_{\mathbb{C}}, \mathfrak{a}_{\mathbb{C}})$ をそのルートの集合とする。 $\mathfrak{a}_{\mathfrak{p}}$ と $\mathfrak{a}_{\mathfrak{p}} + i\mathfrak{a}_{\mathfrak{k}}$ の dual に両立する順序を入れ, 各

の順序に拘らず正の \mathbb{R} - \mathfrak{g} の全体を \mathfrak{P}_+ とする。 $\mathfrak{P}_+ = \{\alpha \in \mathfrak{H}^+ \mid \alpha|_{\mathfrak{A}_\mathfrak{g}} \neq 0\}$,
 $\rho = \frac{1}{2} \sum_{\alpha \in \mathfrak{P}_+} \alpha$ とおく。 $\alpha \in \mathfrak{H}^+$ に対し, $X_\alpha \in \mathfrak{g}$ の \mathbb{R} - \mathfrak{g} vector とし $\pi \mathbb{C} =$
 $\sum_{\alpha \in \mathfrak{P}_+} \mathbb{C} X_\alpha$ とおく。 $\pi = \pi_{\mathfrak{g}} \cap \mathfrak{g}$ とおくと, 岩波分解 $\mathfrak{g} = \mathfrak{k} + \mathfrak{a}_\mathfrak{g} + \pi$,
 $G = K A_\mathfrak{g} N$ ($g = k \exp H(g) n$) を得る。 更に $M = Z_K(A_\mathfrak{g})$ とおく。 $W \in (G, A_\mathfrak{g})$
 の Weyl 群とする。 $\Sigma^+ \in \mathfrak{P}_+$ の元の $\alpha_\mathfrak{g} \wedge$ の制限の全体とすると $\Sigma^+ = \{\lambda, 2\lambda\}$ となる (2λ が無い場合もある)。 ρ, ρ を夫々 $\lambda, 2\lambda$ の重複
 度とする。 $H_0 \in \mathfrak{a}_\mathfrak{g}$ を $\lambda(H_0) = 1$ なるものとする。 $\rho(H_0) = \frac{1}{2}(\rho + 2\rho)$
 である。 以後 $\rho_0 = \rho(H_0)$ とおく。 $t \in \mathbb{R}$ に対し $a_t = \exp t H_0 \in A_\mathfrak{g}$ とおき
 $A_\mathfrak{g}$ と \mathbb{R} を同一視し, $A_\mathfrak{g}$ の Haar 測度を \mathbb{R} の Lebesgue 測度 dt で定める。
 また $\nu \in \wedge(\mathfrak{a}_\mathfrak{g} \text{ dual})$ に対し $r = \nu(H_0) \in \mathbb{R}$ と \wedge と \mathbb{R} を同一視し, \wedge 上
 の測度を dt の dual 測度 $dr/2\pi$ で定める。 dk, dm を K, M の正理化
 された Haar 測度とし, N の Haar 測度 dn は $\int_N \exp(-2\rho(H(\bar{n}))) dn = 1$
 $(\bar{n} = \theta(n^{-1}))$ を満たすものとして定める。 G 上の Haar 測度 dg は $dg =$
 $\exp 2\rho(\log h) dk dh dn$ で定める。 一般に G の部分群 L に対し, \hat{L} で L の
 既約 \mathbb{C} - \mathfrak{g} 表現の同値類の全体を表すことにする。 また, 任意の有
 限次元表現 χ に対し $\chi_\mathfrak{g} = \chi|_{\mathfrak{g}}$ とおく。

さて, $f \in C_c(G)$ に対し, その Abel 変換 F_f を次で定義する。

$$F_f(\mathfrak{m}a) = e^{t\rho_0} \int_{K \times N} f(k \mathfrak{m} a n k^{-1}) dn dk.$$

$\pi_{3,\nu}$ ($3 \in \hat{M}$) $\in G$ の主系列表現, $\theta_{3,\nu} \in$ その指標とすると

$$\theta_{3,\nu}(f) = \int_{M \times \mathbb{R}} F_f(\mathfrak{m}a) \chi_3(\mathfrak{m}) e^{it\nu} dt dm$$

が成立し、更に反転公式と Peter-Weyl の定理により、次が分る。

$$(1.1) \quad F_f(\text{mat}) = \frac{1}{2\pi} \sum_{\xi \in \hat{M}} \int_{\mathbb{R}} \theta_{\xi, \nu}(f) \overline{\chi_{\xi}(M)} e^{-i\nu t} d\nu$$

E と $\tau \in \hat{K}$ に付随した G/K 上の vector bundle とし、 $C^{\infty}(E)$ と E 上の C^{∞} section の全体を E と表す。 $C^{\infty}(E)$ は G -module であるが、その G -作用から自然に $U(\mathfrak{g})$ (展開環) の $C^{\infty}(E)$ への作用が引き起こされる。そこで、 $\mathcal{D}_E \in U(\mathfrak{g})$ と G の Casimir 作用素とし、これを E 上の G -不変楕円型微分作用素とみなし、これを E 上の \mathcal{D}_E と置くことにする。いま $\nabla^2 \in E$ 上の G -不変接続から定まる connection Laplacian とすると次が成り立つ。

Proposition 1. [11] scalar λ_0 が存在して $\mathcal{D}_E = \nabla^2 + \lambda_0 I$ が成り立つ。

$\Gamma \in \Gamma \backslash G$ が compact な G の torsion free な離散部分群とする。□

$\Gamma \backslash G/K$ は多様体で、 Γ は G/K に等長に作用するから、 G/K の \mathfrak{g} - \mathfrak{m} 構造を $\Gamma \backslash G/K$ に落とし、 $G/K \rightarrow \Gamma \backslash G/K$ は局所等長である。よって、 \mathcal{D}_E , $\nabla^2 \in \Gamma \backslash E$ 上の楕円型微分作用素に push down したものを \mathcal{D}_{Γ} , ∇_{Γ}^2 とすれば、 $\mathcal{D}_{\Gamma} = \nabla_{\Gamma}^2 + \lambda_0 I$ が成り立つ。

Γ の有限次元 \mathbb{C} -表現 U を Γ から誘導された G の表現とすると、 Γ の級数から $U \simeq \sum_{\pi \in \hat{G}} m_{\Gamma}(\pi) \pi$ (離散直和) が成り立つ。 Γ の元 γ は $A = A_K A_P$ の元と共役故、その共役元 $\in \mathfrak{h}(\gamma) = \mathfrak{h}_K(\gamma) \mathfrak{h}_P(\gamma)$ と記す。 $u_{\gamma} = \lambda(\log \mathfrak{h}_P(\gamma))$ と定義すると $|u_{\gamma}|$ は γ にのみ依存する数であり、 $\mathfrak{h}_K(\gamma)$ は M の共役を除いて定まる。また、 $C_{\Gamma} \in \Gamma$ の元の

Γ -共役類の代表元の全体とすると $\{|u_r| \mid r \in \Gamma \setminus \{e\}\}$ は最小値(20)をもつことが知られている。 Γ の任意の元 $\delta (\neq e)$ は unique な primitive 元 δ の正の巾表示をもつので、整数 $j(\delta) \in \mathbb{Z}$ と $\delta = \delta^{\pm j(\delta)}$ で定める。更に $\Gamma \backslash G$ の測度は $\int_{\Gamma \backslash G} \sum_r f(\delta g) d\delta = \int_G f(g) dg$ で正規化し、 $\text{vol}(\Gamma \backslash G)$ はこの測度による $\Gamma \backslash G$ の volume とする。以下の議論において主たる道具となる跡公式は、 $f \in C_c^\infty(G)$ に対し次のように書ける。

$$(1.2) \quad \sum_{\pi \in \hat{G}} m_\pi(\pi) \Theta_\pi(f) = \chi_f^*(e) \text{vol}(\Gamma \backslash G) f(e) \\ + \sum_{r \in \Gamma \setminus \{e\}} \chi_{\Gamma}(r) |u_r|^{j(r)-1} C(h(r)) F_f(h(r))$$

ここで、 Θ_π は π の指標、 $C(h)$ は G の構造から決まる正值関数で、 $C(h(r)) F_f(h(r))$ は r の G -共役類にのみ依存する数である。詳しくは [1] を見られたい。

$\mathcal{L}'(G)$ を Harish-Chandra の意味に於て integrable な急減少関数の空間とする。跡公式に適用可能な関数 (admissible 関数) の一つの十分条件として次の Miatello [6] の結果がある。

Proposition 2. K -centralかつ K -finite な $\mathcal{L}'(G)$ の元は admissible 関数である。

§2. Selberg zeta の対数微分の構成, 及びその性質.

$$\hat{M}_\tau = \{\exists \beta \in \hat{M} \mid [\tau|_{\beta}, \beta] \neq 0\} \quad (\tau \in \hat{K}) \text{ とおく。} \quad \lambda_{\beta, \nu} := \pi_{\beta, \nu}(\beta_\nu)$$

とおく $\lambda_{3,\nu} = -(\nu^2 + \rho_0^2 + \lambda_3)$ である。多項式 P_ν を

$$P_\nu(X) = \prod_{\substack{j \in M_\nu \\ j=1 \sim r}} (X - \lambda_{3,i_j})^{N_j}$$

と定義する。但し、 $i_j, N_j (j=1 \sim r)$ は、 G, τ によって定まる、ある関数 (C_τ -関数等) の上半平面における極とその位数であるが詳細は [6] を見られたい。(下記の Proposition 5. (ii) の成立に必要) ν に関する偶多項式 P_ν^2 を $P_\nu^2(\nu) = P_\nu(\lambda_{3,\nu})$ で定義する。また、 D_ν^2 でその Fourier 変換が P_ν^2 となる \mathbb{R} 上の微分作用素を表すものとする。

正数 $\varepsilon_0 \in \{ |u| \mid u \in G \setminus \{e\} \}$ の最小値よりも小さくとる。 $g \in C_c^\infty(\mathbb{R})$ を以下の性質を持つ実数値関数とする: (1) 偶関数, (2) 0 のある近傍で $g \equiv 0$, (3) $g(x) = c$ (定数) on $x \geq \varepsilon_0$, (4) $0 \leq g \leq c$ 。このような関数は実際に存在する。定数 $c = c_3$ は後に都合の良いように定めることにする。

いま、 $H(r) = \int_0^\infty g(x) e^{irx} dx (r \in \mathbb{C})$ とおくと、 $g \in C_c^\infty(\mathbb{R})$ であるから古典的な Paley-Wiener 定理より次が従う。

Proposition 3. [1] H は整関数である。更には、 $\forall n \geq 1, \forall m \neq 0$ に対し定数 $C_{m,n} > 0$ が存在して

$$|d^m H(r)/dr^m| \leq \begin{cases} C_{m,n} (1+|r|)^{-n} & : \operatorname{Im} r \geq 0 \\ C_{m,n} (1+|r|)^{-n} \exp(\varepsilon_0 |\operatorname{Im} r|) & : \operatorname{Im} r < 0 \end{cases}$$

が成り立つ。

$\forall s \in \mathbb{C}$ に対し MA_T 上の関数 ${}^3\mathcal{G}_s$ を次で定義する。

$$(2.1) \quad {}^3\mathcal{G}_s(ma) := [3:\tau_M] \overline{\chi_3(m)} D_\tau^3(g(\log a) \exp(-(s-\rho_0)|L))$$

但し、 $\tau_M = \tau|_M$ である。この ${}^3\mathcal{G}_s$ の MA_T の指標 (σ, ν)

Fourier 変換

$$\widehat{{}^3\mathcal{G}_s}(\sigma, \nu) = \int_{\mathbb{R} \times M} {}^3\mathcal{G}_s(ma_t) \chi_\sigma(m) e^{i\nu t} dm dt$$

を計算すると、

Proposition 4. $\operatorname{Re} s > \rho_0$ ならば

$$\widehat{{}^3\mathcal{G}_s}(\sigma, \nu) = [3:\sigma][3:\tau_M] P_\tau^3(\nu) \left\{ \frac{H(i(s-\rho_0)-\nu)}{s-\rho_0+i\nu} + \frac{H(i(s-\rho_0)+\nu)}{s-\rho_0-i\nu} \right\}$$

となる。

$\tau \in \hat{K}$, $3 \in \hat{M}_\tau$ に対し

$${}^3\mathcal{G}_s(x) = d_\tau^{-1} \frac{1}{4\pi} \sum_{\sigma \in \hat{M}_\tau} \int_{\mathbb{R}} \tau_\sigma(E_\tau \pi_{\sigma, \nu}(x) E_\tau) \widehat{{}^3\mathcal{G}_s}(\sigma, \nu) \mu_\sigma(\nu) \quad (\operatorname{Re} s > 2)$$

$${}^3\mathcal{H}_s(x) = d_\tau^{-1} \frac{1}{4\pi} \int_{\mathbb{R}} \tau_\sigma(E_\tau \pi_{\sigma, \nu}(x) E_\tau) P_\tau^3(\nu) e^{-(\nu^2 + \rho_0^2)s} \mu_\sigma(\nu) \quad (s > 0)$$

とおく。但し、 $\mu_\sigma(\nu)$ は Plancherel 測度、 E_τ は $\pi_{\sigma, \nu}$ を分解したときの type τ の直交射影、また $d_\tau = \dim$ である。このとき次が成り立つ。

Proposition 5. - A. (i) $d_\tau \chi_\tau * \frac{1}{2} g_s = d_{i\tau} g_s * \chi_\tau = \frac{1}{2} g_s$

(ii) $\frac{1}{2} g_s \in \mathcal{L}'(G)$

(iii) $\theta_{\sigma, \nu}(\frac{1}{2} g_s) = \frac{1}{2} \widehat{G}_s(\sigma, \nu)$

5 - B. (i) $d_\tau \chi_\tau * \frac{1}{2} h_s = d_\tau \frac{1}{2} h_s * \chi_\tau = \frac{1}{2} h_s$

(ii) $\frac{1}{2} h_s \in \mathcal{L}'(G)$

(iii) $\theta_{\sigma, \nu}(\frac{1}{2} h_s) = [\sigma : \mathbb{Z}] [\mathbb{Z} : \tau_M] e^{-(\nu^2 p_0^2) s} P_\tau^{\frac{1}{2}}(\nu)$.

Bの方は, Miatello [6] の結果より即座に導ける。(証明は以下に述べる A の証明とほぼ同じ要領。) A の (i) (ii) は, その定義と Plancherel の定理より明らか。(iii) は, 次の Lemma 6 を用いて直接に確かめられる。

Lemma 6. $f \in \overline{H} = \{z \mid \operatorname{Im} z \geq 0\}$ における, 次の 2 性質を満たす有理型関数とする。

(i). 有理関数 $g(z)$ が存在して $|f(z)| \leq |g(z)|$ ($z \in \overline{H}$) が成り立つ。

(ii). f の極 z_1, \dots, z_k は, すべて半平面 $H_{p_0} = \{z \mid \operatorname{Im} z > p_0\}$ 内にある。極 z_j の位数を M_j ($j=1 \sim k$) とする。

$\operatorname{Re} s > 2p_0$ なる $s \in \mathbb{C}$ に対し, 関数 $h(x)$ を

$$h(x) = \frac{H(i(s-p_0)-x)}{s-p_0+ix} + \frac{H(i(s-p_0)+x)}{s-p_0-ix}$$

と定義する。更に,

$$I(t) = \int_{-\infty}^{\infty} h(x) e^{itx} f(x) dx$$

とおくと, $d > \operatorname{Re}(s-p_0)$ を満たす任意の正数 d に対して次が成立する。

Case I. $s-p_0-iz_j \neq 0$ ($j=1 \sim k$) ならば, degree が M_j-1 の多項式 $P_j(t)$ と定数 c が存在して, 次が成立する。

$$e^{\alpha t^2} \left[I(t) - \sum_{j=1}^k P_j(t) e^{iz_j t} - c e^{-t(s-p_0)} \right] = O(\exp \varepsilon_0 |s-p_0-dt|) \quad (t \rightarrow \infty)$$

Case II. ある l ($1 \leq l \leq k$) が存在して $s-p_0-iz_l = 0$ ならば, degree が M_l の多項式 $\tilde{P}_l(t)$ と, degree が M_j-1 の多項式 $P_j(t)$ ($j \neq l$) が存在して

$$e^{\alpha t^2} \left[I(t) - \sum_{\substack{j=1 \\ j \neq l}}^k P_j(t) e^{iz_j t} - \tilde{P}_l(t) e^{-t(s-p_0)} \right] = O(\exp \varepsilon_0 |s-p_0-dt|) \quad (t \rightarrow \infty)$$

が成立する。

証明は, Proposition 3 で述べた H の性質を用いて出来る。

先の Proposition 5-A, B により g_s, h_s は何れも admissible 関数である。夫々, 跡公式に当て換えてみることにする。

まず, g_s については, ε_0 の定め方により

$$D_z^3 (g(|u_1|) \exp(-|s-p_0||u_1|)) = c P_z^3(i(p_0-s)) \exp(-|s-p_0||u_1|)$$

であるから (1.1) (1.2) により, $\operatorname{Re} s > 2\rho_0$ のとき

$$(2.2) \quad \sum_{\pi \in \hat{G}} m(\pi) \theta_{\pi}(\frac{3}{2}g_s) = \chi_{\Gamma}^3(e) \operatorname{vol}(\Gamma \backslash G) \frac{3}{2} g_s(e) \\ + c P_{\frac{3}{2}}^3(i(s-\rho_0)) \sum_{r \in \Gamma \backslash \mathfrak{H}^3} \chi_{\Gamma}(r) |u_r| f(r)^{-1} C(h(r)) \overline{\chi_3(m_r)} [z: \tau_M] \exp(\rho_0 - s) |u_r|$$

と存する。同じくして, $\frac{3}{2}h_s$ については $s > 0$ のとき

$$(2.3) \quad \sum_{\pi \in \hat{G}} m(\pi) \theta_{\pi}(\frac{3}{2}h_s) = \chi_{\Gamma}(e) \operatorname{vol}(\Gamma \backslash G) \frac{3}{2} h_s(e) \\ + \sum_{r \in \Gamma \backslash \mathfrak{H}^3} \chi_{\Gamma}(r) |u_r| f(r)^{-1} C(h(r)) \overline{\chi_3(m_r)} [z: \tau_M] D_{\frac{3}{2}}^3 \left[(\frac{3}{2}h_s)^{-\frac{1}{2}} e^{-(\rho_0 s + u_r^2/4s)} \right]$$

が成立する。

(2.2) の右辺第2項を $\eta_{\frac{3}{2}}^3(s)$ とおくと, $\operatorname{Re} s > 2\rho_0$ でこの級数は広義一様絶対収束し, そこで正則関数を与えろ。同じく (2.3) の右辺第2項を $L_{\frac{3}{2}}^3(s)$ とおく。この級数は $s > 0$ で広義一様絶対収束している。

$L_{\frac{3}{2}}^3(s)$ は, 大旨, heat operator $-\nabla_r^2$ の kernel の trace を変形したものである。次の Proposition 7 は, Selberg zeta の対数微分 (と言えろ) $\eta_{\frac{3}{2}}^3(s)$ が, $L_{\frac{3}{2}}^3(s)$ の Fourier-Laplace 変換で与えられていることを主張している。

Proposition 7 $\operatorname{Re} t > 2\rho_0$ ならば

$$\eta_{\frac{3}{2}}^3(t) = 2c(t-\rho_0) \int_0^{\infty} e^{-t(t-2\rho_0)s} L_{\frac{3}{2}}^3(s) ds$$

次に $\pi_3^s(s)$ の全平面 Λ の有理型関数としての解析接続について述べることにする。はじめに, (2.2) の左辺の和に現れる \hat{G} に parameter を入れる為には Langlands [5] の結果を記す。

Proposition 8. \hat{G} は次の (i) ~ (v) から成る。

- (i) $\pi \in \hat{G}_d$ (離散系列)
- (ii) $\pi \in \hat{G}_c$ (既約な unitary 主系列)
- (iii) $\pi \in \{ \pi_{3,0}^+, \pi_{3,0}^- \}$ (離散系列の極限)
- (iv) $\pi \in \hat{G}_{comp}$. (補系列, $\pi \cong \pi_{3,v} \Rightarrow 0 > -iv \gg -\rho_0$)
- (v) π は infinitesimal に Langlands quotient $L_{\sigma,v} = \pi_{\sigma,v} / \text{Ker } A(v)$ ($0 > -iv \gg -\rho_0$) と同値。但し $A(v): H^{\sigma,v} \rightarrow H^{\sigma,-v}$ ($s \in W \setminus \{1\}$) は canonical な intertwining operator.

$\exists \in \hat{M}_\tau \vdash \exists \uparrow L$

$$Q_\tau^3 = \{ \pi \in \hat{G} \mid \pi \in U, \theta_\pi(\frac{3}{2}g_s) \neq 0 \},$$

$${}^1 Q_\tau^3 = \{ v \in \mathbb{R}^+ \mid \pi_{3,v} \in \hat{G}, \pi_{3,v} \in U \},$$

$${}^2 Q_\tau^3 = \{ v \in i\mathbb{R}^+ \setminus \{0\} \mid \pi_{3,v} \in \hat{G}, \pi_{3,v} \in U \}$$

とおく。 $\frac{3}{2}g_s$ の定義より明らかに $\hat{G}_d \cap Q_\tau^3 = \emptyset$ である。

さて、便宜的に以下の規約を設けることにする。

1. $\pi_{3,0} \cong \pi_{3,0}^+ \oplus \pi_{3,0}^-$ とする場合。

$$m_{\frac{3}{2}}(\pi_{3,0}^+) \theta_{\pi_{3,0}^+}(\frac{3}{2}g_s) \text{ と } m_{\frac{3}{2}}(\pi_{3,0}^-) \theta_{\pi_{3,0}^-}(\frac{3}{2}g_s) \text{ の少なくとも一方}$$

は 0 である。そこで新しく $\pi_{3,0}$ を次のように定義する。

$$m_{T_r}(\pi_{\beta,0}) \cdot \pi_{\beta,0} := \begin{cases} m_{T_r}(\pi_{\beta,0}^+) \pi_{\beta,0}^+ & : \Theta_{\pi_{\beta,0}^+}(\frac{\beta}{z} g_s) \neq 0 \\ m_{T_r}(\pi_{\beta,0}^-) \pi_{\beta,0}^- & : \Theta_{\pi_{\beta,0}^-}(\frac{\beta}{z} g_s) \neq 0 \end{cases}$$

2. $\pi \cong L_{\sigma,v} = \pi_{\sigma,v} / \text{Ker } A(v)$ (infinitesimal) の場合.

$\text{Ker } A(v) \cap (H^{\sigma,v})_z = 0$ ならば $\Theta_{L_{\sigma,v}}(\frac{\beta}{z} g_s) = \Theta_{\pi_{\sigma,v}}(\frac{\beta}{z} g_s)$ である。また、 $\text{Ker } A(v) \cap (H^{\sigma,v})_z \neq 0$ ならば、 $P_z^{\sigma}(v) = P_z(\lambda_{\sigma,v}) = 0$ と存るので $\pi_{\sigma,v}(\frac{\beta}{z} g_s) = 0$ である。そこで、 $\pi = \pi_{\sigma,v}$ と定義する。

この規約の下で明らかに $Q_z^{\beta} \simeq {}^1Q_z^{\beta} \cup {}^2Q_z^{\beta}$ である。以後 $Q_z^{\beta} = {}^1Q_z^{\beta} \cup {}^2Q_z^{\beta}$ とし Q_z^{β} に parameter を入れる。更に、
 $\tilde{Q}_z^{\beta} = \{v \in Q_z^{\beta} \mid P_z^{\beta}(v) \neq 0\}$ とおく。

[1] [12] と同様にして次の Proposition 9.10.11 が得られる。

Proposition 9. $A_z^{\beta}(s) = \sum_{v \in \tilde{Q}_z^{\beta}} m_{T_r}(\pi_{\beta,v}) \frac{\beta}{z} g_s(\beta, v)$

は、 $\text{Re } s > 2\rho_0$ で正則で、全平面に有理型関数として解析接続される。その極はすべて一位であり、位置とそこにおける留数はつぎの通り。

極: $\rho_0 \pm i\nu \quad (\nu \in \tilde{Q}_z^{\beta})$

留数: $c m_{T_r}(\pi_{\beta,v}) P_z^{\beta}(v) \quad [\beta: \mathbb{Z}M]$

但し、 ρ_0 が極なら ($0 \in \tilde{Q}_z^{\beta}$)、そこの留数は

$2c m_{\Gamma}(\pi_3, \nu) P_{\frac{1}{2}}^3(\nu) [\mathfrak{z}: \mathfrak{z}_M]$ となる。

Proposition 10. $r_k = r_k^3$ ($k=0, 1, 2, \dots$) \in Plancherel 測度 μ_3 の上半平面
における極とし, $d_k = d_k^3$ をその極における留数とすると

$${}_{\frac{1}{2}}g_s(c) = i [\mathfrak{z}: \mathfrak{z}_M] \sum_{k \geq 0} P_{\frac{1}{2}}^3(r_k) \frac{H(i(s-p_0) + r_k)}{s - p_0 - ir_k} d_k$$

であり, 右辺の級数は $\{p_0 + ir_k\}_{k=0, 1, \dots}$ を除いたところで広義一様
絶対収束するので, 全平面での有理型関数を与える。その極はすべて
-1位でつぎのようになる。

$$\text{極: } p_0 + ir_k \quad (k=0, 1, \dots)$$

$$\text{留数: } i [\mathfrak{z}: \mathfrak{z}_M] P_{\frac{1}{2}}^3(r_k) d_k \cdot c$$

Proposition 11. $\eta_{\frac{1}{2}}^3(s)$ は $\text{Re } s > 2p_0$ で正則で (2.2) により関係式

$$\eta_{\frac{1}{2}}^3(s) = A_{\frac{1}{2}}^3(s) - \chi_{\frac{1}{2}}^3(c) \text{vol}(\Gamma \backslash G) {}_{\frac{1}{2}}g_s(c)$$

が判るから, 全平面に有理型関数として延長出来る。その極は,

Proposition 9, 10 を合わせたものとなり, すべて -1位である。

$$\Phi_{\frac{1}{2}}^3(t) = c [\mathfrak{z}: \mathfrak{z}_M] P_{\frac{1}{2}}^3(it) \chi_{\frac{1}{2}}^3(c) \text{vol}(\Gamma \backslash G) \mu_3(it)$$

とよくと次の関数等式が成立する。

$$\text{Theorem 12. } \eta_{\frac{1}{2}}^3(s) + \eta_{\frac{1}{2}}^3(2p_0 - s) + \Phi_{\frac{1}{2}}^3(s - p_0) \equiv 0 \quad (s \in \mathbb{C}).$$

証明は従来の方法 ([1][8]等) を用いても出来るが, Proposition 7 の関係があるので, Laplace 変換の逆変換公式を利用することにより少しばかり簡潔な別証明が得られる。

§3. Selberg zeta 関数

$$\begin{aligned}\tilde{\eta}_z^3(s) &= \eta_z^3(s) (P_z^3(i(s-p_0)))^{-1}, \\ \phi_z^3(s) &= \Xi_z^3(s) (P_z^3(i(s-p_0)))^{-1} \\ &= c X_{T_r}(c) \text{vol}(\Gamma \backslash G) \mu_3(i(s-p_0))\end{aligned}$$

とおく。明らかに関数等式

$$(3.1) \quad \tilde{\eta}_z^3(s) + \tilde{\eta}_z^3(2p_0 - s) + \phi_z^3(s) = 0$$

が成り立つ。

とすると, $P_z^3(i(s-p_0)) = \prod_{\substack{\sigma \in \hat{\mu}_\tau \\ j=1 \sim r}} \{(s-p_0)^2 - z_j^2 - \lambda_3 + \lambda_\sigma\}^{N_j}$ であったから, $\tilde{\eta}_z^3$ は新たに, $s = p_0 \pm \sqrt{z_j^2 - \lambda_3 + \lambda_\sigma}$ ($j=1 \sim r, \sigma \in \hat{\mu}_\tau$) を極に持つ可能性がある。いま $\alpha_{j,\sigma}^\pm = p_0 \pm \sqrt{z_j^2 - \lambda_3 + \lambda_\sigma}$ (複号同順) とおく。更に $\{\alpha_{j,\sigma}^\pm\}$ のうち実際は $\tilde{\eta}_z^3(s)$ の極に存しているものに番号を付けて $\{\beta_k^\pm\}_{k=0 \dots 2}$ とする。但し, $s = p_0$ が極に存しているときは, $\beta_0^+ - \beta_0^- = p_0$ とする。関数等式 (3.1) により, $\alpha_{j,\sigma}^+$ が極ならば $\alpha_{j,\sigma}^-$ も極に存していることに注意されたい。

$\tilde{\eta}_z^3(s)$ の β_k^\pm におけるローランド展開の主要部を $P_k^\pm(s)$ とする。

いま, $f(s) = \tilde{\eta}_r^3(s) - (P_k^+(s) + P_k^-(s))$ とおく。但し, $k=0$ で $\rho_k^{\pm} = \rho_0$ のときは, 自明な修正を施すものとする。 $\phi_r^3(s)$ は一位の極しかもたないから, 関数等式より, $\beta_k^+ + \beta_k^- = 2\rho_0$ に注意すると

$$P_k^{\pm}(s) = \sum_{\substack{n < 0 \\ n: \text{奇数}}} \frac{C_n}{(s - \beta_k^{\pm})^n} \quad (\text{複号同順})$$

の形であることが判る。それ故 $f(s)$ は $s = \beta_k^{\pm}$ で正則で, $\tilde{\eta}_r^3(s)$ と同じ関数等式を満たす有理型関数である。

$$B_r^3(s) = \sum_{k=0}^{\infty} (P_k^+(s) + P_k^-(s)),$$

$$\zeta_r^3(s) = \tilde{\eta}_r^3(s) - B_r^3(s)$$

とおく。上記の考察と $\zeta_r^3(s)$ の作り方により次が得られる。

Proposition 13. $\zeta_r^3(s)$ は, 一位の極のみを持つ全平面での有理型関数で, その極及び留数は以下の通りである:

極	留数
$s = \rho_0 \pm i\nu \quad (\nu \in \tilde{\mathcal{Q}}_r^3)$	$c \cdot [\exists: \tau_M] m_{\tau}(\pi_3, \nu)$
$s = \rho_0 + i\nu_k \quad (k \gg 0)$	$i c \cdot d_k [\exists: \tau_M] \chi(e) \text{ord}(\Gamma \backslash G)$

また, 関数等式

$$\zeta_r^3(s) + \zeta_r^3(2\rho_0 - s) + \phi_r^3(s) = 0 \quad (s \in \mathbb{C})$$

が成り立つ。

ここで, id_k は有理数, $v_k(\Gamma|G)$ も我々の測度の決め方により有理数であることが知られているので, $C = C_3 (= H(0))$ を十分大なる正整数にとることによって $\zeta_k^3(s)$ の留数を全て整数と出来る。そこで, このような性質を満足する正整数のうちで最小の値をもって $C = C_3$ の値と定めることにする。そうすると, $(d/ds)(\log Z_k^3(s)) = \zeta_k^3(s)$ を満足する有理型関数 $Z_k^3(s) = Z_k^3(s, \Gamma)$ が定数を除き一意に定まる。いま, (偶) 整数 m_0 を次のように定義する。

$$m_0 = \begin{cases} 0 & : 0 \notin \tilde{Q}_k^3 \\ 2C m_{\Gamma}(\pi_3, 0) [3 : \Gamma] & : 0 \in \tilde{Q}_k^3 \end{cases}.$$

この m_0 を用いて $Z_k^3(s)$ を

$$(s - p_0)^{-m_0} Z_k^3(s) \rightarrow 1 \quad (s \rightarrow p_0)$$

と正規化しておく。このようにして定義された $Z_k^3(s)$ は次の諸性質を持つ。

Theorem 14. (A) $Z_k^3(s)$ は $\operatorname{Re} s > 2p_0$ において正則で, 全平面に有理型関数として解析接続可能。

(B) 関数等式をもつ:

$$Z_k^3(2p_0 - s) = Z_k^3(s) \exp \int_0^{s-p_0} \phi_k^3(z) dz.$$

注意: 積分 $\exp \int_0^{s-p_0} \phi_k^3(z) dz$ は明らかに well-defined である。

(C). $Z_{\Gamma}^{\pm}(s)$ の自明でない零点は、有限個の例外を除き、すべて線分 $\{s \mid \operatorname{Re} s = \rho_0\}$ 上にある。有限個の例外は、(もし存在するとすれば) 実数で、区間 $[0, 2\rho_0]$ に ρ_0 に関し対称に分布している。零点 $s = \rho_0 \pm i\nu$ ($\nu \in \mathbb{Q}^{\pm}$) の位数は $C \cdot [\mathfrak{z} : \tau_M] m_{\Gamma}(\pi_{\mathfrak{z}, \nu})$ である。

(D). $Z_{\Gamma}^{\pm}(s)$ は $s = \rho_0 + i\tau_k$ ($k \geq 0$) で位数が $i c d_k [\mathfrak{z} : \tau_M] \chi(e) \operatorname{vol}(H_g)$ の (自明な) 極、或いは零点を有する。極であるか零点であるかの識別は $i d_k$ の符号による。

(E) $\operatorname{Re} s > 2\rho_0$ で無限積表示をもつ：

$$Z_{\Gamma}^{\pm}(s) = f_{\Gamma}^{\pm}(s) \prod_{s \in \operatorname{Prim} \Gamma} \prod_{\alpha \in L} (\det(I - T_{\Gamma}(s)) \zeta_{\alpha}(R_{\Gamma}(s))^{-1} \zeta_{\alpha}(R_{\Gamma}(s))^{-1} e^{-s u_{\alpha}})^{c_1 m_{\alpha}}$$

但し、 $\circ \operatorname{Prim} \Gamma$: Γ の primitive な元の全体。

$\circ P_{+} = \{d_1, \dots, d_t\}$ とすると $L = \{\alpha = \sum_{i=1}^t m_i d_i \mid m_i \in \mathbb{Z}, m_i \geq 0\}$ であり、 m_{α} は $\alpha \in L$ に $\alpha = \sum_{i=1}^t m_i d_i$ と表したときの順序をきめた表し方の数とする。また ζ_{α} は $\alpha \in L$ に対する A の指標である。

$\circ K$ はある定数で

$$f_{\Gamma}^{\pm}(s) = K \cdot \exp - \int_0^{s-\rho_0} B_{\Gamma}^{\pm}(z) dz$$

とおいた。ここで左辺の複素積分は $\mathbb{C} \setminus (-\infty, \mu)$ 内の道 (μ はある正数) で well-defined である。但し、 $s=0$ が $B_{\Gamma}^{\pm}(s)$ の極である場合は、 $Z_{\Gamma}^{\pm}(s)$ の正規化の方法を幾分修正することになる。

上記の $Z_{\tau}^3(s)$ を用いて

$$Z_{\tau}(s, T_{\Gamma}) = \prod_{3 \in \hat{M}_{\tau}} Z_{\tau}^3(s, T_{\Gamma})$$

と定義する。明らかに上と同様の定理が成立するが、詳細は省略する。この $Z_{\tau}(s, T_{\Gamma})$ を $\tau \in \hat{K}$ に付随した vector bundle の Selberg 型の zeta 関数と呼ぶことにする。

以上。

文献

- [1]. Gangolli, R. Zeta functions of Selberg's type for compact space forms of symmetric spaces of rank one. *Illinois J. Math.* 21, 1~41 (1977).
- [2]. Gangolli, R., Warner, G. On Selberg's trace formula. *J. Math. Soc. Japan* 27, 328~343 (1973).
- [3]. Knapp, A.W., Okamoto, K. Limits of holomorphic discrete series. *J. Func. Analysis* 9, 375~409 (1972).
- [4]. Knapp, A.W., Stein, E.M. Intertwining operators for semi-simple groups II. *Invent. Math.* 60, 9~84 (1980).
- [5]. Langlands, R. On the classification of irreducible representations of algebraic groups, Institute for Advanced Study, Princeton, N.J., (1975) (preprint).
- [6]. Miatello, R.J. The Minakshisundaram-Pleijel coefficients for the vector valued heat kernel on compact locally symmetric spaces of negative curvature. *Trans. A.M.S.* 260 1~33 (1980).
- [7]. Scott, D. Selberg type zeta functions for the group of complex two by two matrices of determinant one. *Math. Ann.* 253, 177~194 (1980).

- [8]. Selberg, A. Harmonic analysis and discontinuous groups in weakly symmetric Riemannian spaces with applications to Dirichlet series. *J. Indian Math. Soc.* 20, 47~87 (1956).
- [9]. Trombi, P.C. Harmonic analysis of $C^p(G/F)$ ($1 \leq p < 2$). *J. Func. Analysis*. 40, 84~125 (1981).
- [10]. Wallach, N.R. On the Selberg trace formula in the case of compact quotients. *Bull. Amer. Math. Soc.* 82, 171~195 (1976).
- [11]. Wallach, N.R. On the asymptotic formula of Gelfand and Gangolli for the spectrum of $\Gamma \backslash G$. *J. Diff. Geom.* 11, 91~101 (1976).
- [12]. Wakayama, M. Zeta functions of Selberg's type for compact quotient of $SU(n, 1)$ ($n \geq 2$). (preprint).